



館長だより

山形県産業科学館

令和7年12月28日(日)

発行 館長 加藤智一

衣食足りて礼節を知る

「衣食足りて礼節を知る」ということわざがあります。「生活が安定し、衣服や食べ物に困らなくなると、人は初めて礼儀や道徳を大切にできるようになる」という意味です。つまり、まず基本的な生活が満たされてこそ、心の余裕が生まれ、礼儀や文化的なふるまいが身につく、という人間観を表した言葉ですね。この言葉は、中国・春秋時代の政治家 管仲(かんちゅう)の思想をまとめた書物「管子(かんし)」に由来する言葉です。正確には「管子・牧民」の一節にある、「倉廩実ちて則ち礼節を知り、衣食足りて則ち榮辱を知る」という文が元になっています。

しかしどうでしょう、現代日本では「豊かさ=礼節の向上」には必ずしもつながっていないように思えるのですが!? このギャップは、私個人の思い過ごしでしょうか、それとも心理学的に説明できるものなのでしょうか。ということで、その辺りを探ってみました。

米国の心理学者マズロー※は、人間の欲求を「生理的→安全→所属→承認→自己実現」と段階化しました。昔であれば、衣食が満たされると、ようやく「礼節(所属・承認)」に意識が向いたのですが、現代では、衣食が「当たり前」になり、承認欲求が過剰に肥大化しているというのです。その結果、SNSでの自己主張が強まり、他者への配慮より「自分がどう見られるか」への関心が強まり、礼節より「効率・自己都合」が優先されるようになったというのです。つまり、豊かさが礼節を育てるのではなく、承認欲求を刺激し続ける社会構造が礼節を押しのけてしまったのです。

また、別の見方をすると、豊かさがもたらす個人主義の副作用として、「社会的規範の弱体化」があげられます。心理学では、社会が豊かになると、個人主義が強まり、共同体規範が弱まるという傾向が知られています。たとえばかつては、地域社会・家族・職場といった周囲の目が厳しく、礼節は共同体のルールでした。ところが現代では、個人の自由が尊重され、他者の行動に口を出しにくい風潮があります。結果として、礼節は「守るべき規範」から「個人の選択」へと変化してしまったと考えられます。

さらに現代は、情報量・選択肢・刺激が圧倒的に

増えた社会でもあります。心理学では、認知負荷が高まると、他者への配慮が低下し、礼節のような「高次の社会的行動」が後回しになることが分かっています。つまり、物質的には豊かになったのに、心の余裕はむしろ減っているという逆説的な減少が起きているのです。

もう一つ忘れてはいけない見方として、教育があります。礼節は本来、家庭・地域社会・学校の「重層的な学習」で身につくものでした。しかし現代では、核家族化が進み、地域コミュニティも希薄化。学校も多忙化を極め、益々礼節を学ぶ場が減少しています。豊かさがあっても、学習機会がなければ礼節は育たないという訳です。



※マズロー：1908年、ニューヨーク・ブルックリン生まれ。ウィスコンシン大学で心理学を学び、博士号を取得。ブルックリン大学、ブランドיס大学などで教鞭をとり、1970年に62歳で死去。人間性心理学の創始者の一人で、人間を「問題のある存在」ではなく、成長し、自己実現へ向かう存在として捉えた点が特徴。人間の欲求を5段階の階層(生理的欲求→安全→所属と愛→承認→自己実現)として整理した、欲求段階説(マズローのピラミッド)理論で有名。